



国際基督教大教授

# 共存へ 礼節ある不寛容

## 森本あんり氏が著書

世界中で社会の分断が指摘され、寛容の必要性が叫ばれている。だが、「人は必ず分かれ合える」といった寛容論は優等生的で、違和感も残る。そんな時、『不寛容論』（新潮選書）で森本あんり・国際基督教大教授（神学）が説く寛容論が印象的だ。なにせ「最低限の礼節だけを守れば、内心は嫌っていてもよい」というのだから。

タン、ロジャー・ウィリアムズを中心に寛容を論じる。彼は厚い信仰心から、異なる信仰を持つ先住民にも敬意を持って接するなど、寛容論を実践した。そして後の連邦憲法にもつながる、宗教の自由や政教分離の概念を打ち立てた。

彼の信念の背景には、中世的な寛容論があるという。それは、中世の教会法学者たちが唱え、世俗支配にも広がっていったもの。「人間は不完全なものだ」という聖書的な理解の元で、異教徒や高利貸し、売春婦らを悪としながらも、「より大きな悪を防ぐ」などの名目で、単一社会の内部に取り込んでいった。

中世的な寛容論への着目は、キリスト教の支配力が弱まり理性を重視する近代になって、人々はようやく寛容になったという一般的な理解に驚きを与える。かたや近年の寛容は、「相手を100%受け入れよう」「みんな違ってみないい」などと、多様性を無条件にたたえているようだ。だが森本氏は、これらが人の内心に指図していると批判。人が寛容になる際には、本当は好ましくないという気持ちを持ってはいるはずなのに、それを無視しているから、絵空事に聞こえるという。

『反知性主義』『異端の時代』などの著書で、キリスト教史を説き起こし、現代社会につながる知恵や課題を鮮やかにあぶり出してきた森本氏。本書ではポリティカル・コレクトネス（政治的正しさ）の欺まん性に加え、日本社会の課題も明らかにする。それは、寛容だと自負している自分たちの社会が、実は異質な他者と深く接する機会がなく、他者への関心もなかったただけで、「無寛容」にすぎないのではないかとの指摘だ。「その自覚がないと、一気に不寛容に転化する危険性もある」

例えば今後、イスラム教徒が社会に増えたら、一夫多妻制に対応するよう法改正をするのか。「ハードケースでこそ、寛容が問われる。寛容論を鍛えておく必要性は、今後ますます高まる」と話している。

（小林佑基）

『不寛容論』について語る森本氏。「本音と建前を使い分け、異質な他者にも表面上は親切的な日本人の振る舞い方は、真の相互理解につながる可能性がある」とも語る